動詞から量詞へ

橋本　永貢子

（2009年6月29日受理）

From Verbs to Classifiers

Ekuko HASHIMOTO

1．はじめに

本稿は、中国語において本来動詞であった語が量詞として機能するようになったことについて、成立時の対象物との意味的関係、およびその後の意味と機能の変遷という観点から考察する。

現代中国語における量詞について語られる時に、例えば、細長いものは“枝”、塊状のものは“块”……というように、量詞をモノの形状的属性と関連付けることが少なくない。また、中国語に限らず、英語やフランス語など一般に類別詞を用いない言語においても、いわゆる不可算名詞で表されるモノの量をいう時は、それが収納される容器――例えばカップ“杯”やビン“瓶”――が用いられる。形状を表す語や容器を表す語は、文法的には名詞であることが多く、実際に、現代中国語における量詞のおよそ8割は、名詞を出自とするものである[1]。残りの2割は、少数の形容詞（“品”“重”など）、および動詞を出自とするものであるが、全体の割合の低さに反して、中には、“张”や“把”など、使用頻度の高いものがあり、量詞というカテゴリーを考える上で無視することができない。また、モノを動作・行為で数えるという方法は、言語における空間と時間の関係という観点からも大変興味深い現象だと思われる。

そこで以下では、文法化の理論を考察の背景に、動詞が量詞――いわゆる名量詞――として働くようになり、さらにその文法的な機能を増していった過程について、名詞を出自とするものと対照しながら見ていく。第2節では、現代の量詞の原型がほぼ出来上がったとされる魏晋南北朝期までの状況を中心に、動詞から量詞への文法化が、

[1] この割合は《现代汉语频率词典》（1986年 北京学院出版社）に基づき、使用頻度の高い142個の量詞についてみたものである。また名詞を出自とする量詞の成立と機能的変化については橋本2009参照。

数量をいう対象物とのどのような意味的関係を起源とするのかを整理する。第3節では、いったん量詞として成立した後に意味的に或いは機能的に変化があったことについて、唐代以降の状況にも触れながら検証する。

2．対象物との意味関係

動詞を出自とする量詞についても、対象物の連続的な数量をいう場合と非連続的、すなわち離散的な数量をいう場合に大別できる。ここでは、それぞれの場合について、具体的な対象物との意味関係から前者は4つの、後者は2つのタイプに分けて整理していく。

2.1 連続的な数量をいう場合（計量）（【＋連続的】）

2.1.1 相応量（【＋相応量】）

名詞を出自とする量詞の最も初期の用法は、対象物を入れる容器や、対象物の長さなり重さなりに相応するものを基本単位として示すというものであった。動詞を出自とする量詞の初期の用法にもまた、動作で形作られる空間によって対象物の量を表したと見られるものがある[2]。

1) 或取一编菅焉，或取一秉秆焉，国人投之，遂弗爇也。（左传・昭27）

“秉”は「手に持つ、握る」という動作を表し、“一秉”は“秆”（「藁」）が「一握り」分であることを示している。この用法は、何乐士2000が“相当于‘把’”と指摘するように、連続量を表す“把”の用法と発想を同じくするものである。“把”以外にも、魏晋南北朝期には、同じく「握る」という動作を表す“扼”にも同様の用法が見られるほか、“掬”は「すくう」という動作によって得られる量を基本単位として表すものである。

2) 执吴唐草一把以入山。（抱朴子・仙药篇）
3) 唯手把一束杨枝，一扼葱叶。（高僧传・义解篇）
4) 即以一掬土施佛。（佛国记）

また、“束”や“包／裹”も、「束ねる」や「包む」という動作を表す動詞であるが[3]、

---

2 “秉”は、古くは重量の単位として用いられており、“一秉”は“十六斛（160斗）”。
・冉子与之粟五秉。（论语雍也第六）
3 刘世儒1965参照。

これらの動作によって作り出される空間に納まる量を表している用例が見られる。

5) 宜密使兵人人备青草一束，各五尺围。（魏书・李先传）
6) 五官掾献橘数包。（后汉书・杨由传）
7) 帝患手创积年，沙门出怀中黄散一裹与帝。（宋书・符瑞志）

これらの動詞で表される量は、身体を直接用いる“秉”や“把”とは異なり、束ねるための藁などの長さや包むための布などの大きさによって基本単位が異なる。その点では、対象物の存在の仕方、つまり「束ねた」「包んだ」という状態を表しているという見方も可能である。

2.1.2 組み —— 語義的まとまり（【－相応量】【＋組み】）

相応する量を示すという以外に連続量を表す手段として、それが複数個あることを示すという方法が考えられる。こうした意味関係から名詞出自で量詞として働くようになったものに“双”や“两”がある。動詞では現代語で常用されているものに“对”があるが、量詞としての用法は唐代以降に成立し、上下セットになった服や二人の人などを数えるのに用いられた[4]。

8) 昭阳舞人恩正深，春衣一对直千金（白居易《缭绫念女工之劳也》诗）
9) 皇帝亦见，喜不自升（胜），遂赐衾虎锦綵羅紈，金银器物，美人一对。（变文）
10) 应如天竺难陀寺，一对狻貌相枕眠。（皮日休《重玄寺双矮桧》）

“对”に先立って用いられていたものに、「合わせる」「対応する」の意味を持つ“合”“称”がある。箱状のものは入れ物としての本体部分と蓋の部分とから成るものであることによって“合”で数えられ、上下揃いの服は揃いであることによって“称”で数えられた。

11) 美人以苇篋一合盛所生儿。（汉书・外戚传）
12) 诏赐……朱画盘器十合。（魏书・蠕蠕传）
13) 归公乘马，祭服五称。（左传・闵 2）
14) 赐东园秘器、朝服一称、帛三百匹。（魏书・程骏传）

---

[4] 洪藝芳 2000“其作為量詞，前無所見，首出於唐代，（後略）” p.333 参照。黄載君 1964 は甲骨文に残る「 ⿰又 」という文字が、“其字很可能是‘对’字，至少用法和‘对’一样是无可疑的。”と指摘している。

“副”もまた、“配合”(「そう、そえる」)の意味から、組になったものを数える量詞として用いられるようになったが、15)“同物相配”のみならず、16)“异物相配”にも用いられた。

15) 拜表奉贺，并献……袜若干副。(曹植《冬至献袜颂表》)
16) 赐钱百万；床帐、箪、褥百副。(全晋文・卷6)

16)“副”の用法は、“床帐、箪、褥”の三種類の異なるものを一組としている。同様の用法は、他にも“具”にみられる。

17) 常有村人行过，见地有数十具磨，取一具持归。(幽明录)
18) 公孙渊伏诛，玄菟库犹有玉匣一具。(三国志)
19) 於先武皇帝代，敕此银鞍一具，初不敢乘，谨奉上。(曹植《上银鞍表》)
20) 人就其间得龙骨一具。(述异记・卷下)

17)は、「臼」の上下の石をあわせて言う“同物相配”であるが、18)は入れ物と蓋との“異物相配”である。19)は、“银鞍”のみならず、鐙も含んだ鞍全体の一セットを言い、20)“龙骨”は、部分である一本の骨ではなく、一匹分のまとまった骨を言うために用いられている。“具”は本来「揃える」の意味を持ち、「揃え」られる対象物は複数個であるのに対し、上記の“副”は二つ一組が典型的であるという点で、両者はやや異なっているといえよう。

2.1.3 状態(【－組み】【＋形態】)

ところで、「揃える」という動作は、その動作の結果が対象物の状態として残るような行為であるが、対象物と“具”あるいは“副”の意味関係は、【＋組み】であると同時に、「揃い」であるという状態あるいは【＋形態】とも見ることができる。これは名詞を出自とする“列／行／群”が、対象物の存在の仕方を表すことで結果的に複数であることが示唆され、量詞として用いられるようになったことと軌を一にする。このような対象物の存在の仕方で対象物の量を示しているものに“贯”“聚”“积”がある。

21) 食邑五百户，赐钱一万贯。(魏书・李休传)
22) 终成一聚土，强觅千年名。(亡名释《五苦诗》)
23) 始士瞻梦得一积鹿皮，而从数之，又是一领。(南史・吉士瞻传)

“贯”は、古くは貨幣制度における一つの単位であった(【＋制度】)が、本来は穴の

開いた“钱”に、“贯穿”つまり紐などを「通して」連ねたことからお金を数える量詞として用いられるようになったものである。また“聚”“积”は、ともに“聚积”「寄せ集める」の意味であるから、そのことより“土”や“鹿皮”が一定量存在していることが分かる。“聚”“积”のこの用法は、現代語では“堆”に取って代わられているが、対象物との意味関係という点では同列に配されるものといえよう。

24) 凡兵车百乘，歌钟二肆。（左传襄 11）

“肆”も現代語では、量詞として用いられることはないが、古くは、「並べる」の意味を持ち、次の例では、“歌钟”が二並びあることをいう量詞として用いられている。この用法は、現代語でいうなら“三排椅子”“两排牙齿”という時の“排”に当たるものである。

“聚”“积”“肆”自体は、現代語ではほとんど用いられないが、発想を同じくする語としては、例えば“一挂数株”“一簇野草”“一叠书”“两摞碗”の“挂／簇／叠／摞”などが挙げられる。対象物の存在の仕方を表すことで対象物の量を示すという方法は、金文時代から見られる主要な方法であるが、時期によって変化するような語彙的な要素の濃い方法であるといえよう[5]。

2.1.4 作用、働きかけ（【－形態】【＋作用】）

以上の三つの意味関係のタイプは、名詞を出自とする量詞にも見られたものであるが、動詞を出自とする量詞には、さらにもう一つのタイプがある。

25) 及齐，齐桓公妻织，有马二十乘。（左传・僖 23）

25)で馬は 80 頭であり、“乘”は馬 4 匹をまとめて数える集合量詞であったという[6]。“驷”という語があるように、当時 4 匹の馬は社会的・文化的に意味のあるまとまりであったが、それは通常 4 匹の馬で車を引いていたことによる。春秋期において“乘”は、車を数える際の個体量詞としても機能していたため[7]、あるいは、車のメトノミー

---

5 刘世儒 1965 は、“聚”の項において、次のように記述しその時期に用いられている語彙と量詞として働く語彙が一致していることを指摘している。

这种量词的选择，主要是由时代的词汇系统决定的，和语法习惯没有关系。如南北朝一般管堆聚物叫“聚”不叫“堆”，所以量词用“聚”不用“堆”；现代汉语用“堆”不用“聚”（如“土堆”可说，“土聚”不可说），所以量词用“堆”不用“聚”

6 何乐士 p. 335 参照。

7 “晋荀息请以屈产之乘与垂棘之璧假道於虞以伐虢。”（左传・僖 2）における“乘”の用法は、「乗り物」の意の名詞用法であり、個体量詞として働く場合の意味関係は、繰り返しまたは上位カテゴリーといえる。一方で、動詞としての用法もあり（“昔者赵简子使王良与嬖奚乘，终日

として馬が用いられ、量詞は“乘”のままであったことも推測できる。しかし、実際の現象としては“乘”が馬 4 匹を一まとまりとする集合量詞として働いていることは否定しようがなく、その場合、“乘”の“马”に対する意味関係は「働きかけ」或いは「作用」であると認められる。

“乘”のような一見特殊な用法について、わざわざ取り上げるのは、こうした社会的文化的現象が基本単位を選ぶ際に関与している例が他にもあるからである。もう一つの例が“发”である。当時“矢”は 4 本一組で取り扱っており、“发”がその一組を数える量詞として用いられていたとされる[8]。“矢”の社会的文化的まとまりを表す単位として“发”が用いられたわけであるが、この場合も“发”の“矢”に対する意味関係は、「働きかけ」或いは【＋作用】であるといえよう。

26) 赐以……弓一张，矢四发。（汉书・匈奴传）
27) 子产以幄幕九张行。（左传・昭 13）

さらに 27）の“张”と“幄幕”との意味関係もまた然りである。“幄幕”は天幕と垂れ幕からなるテントであり、25)26)が“同物相配”であるのに対し、“異物相配”であるという違いはあるが、やはり集合量詞と見ることができる。“张”のこの用法は、わずかに 1 例のみであり、これも例外的に扱うべきとする立場もあるかもしれない。しかし、名詞を出自とするものにはない意味関係であり、また次節で取り上げる離散的数量をいう場合を考える上でも有用だと思われるので、敢えてここに指摘しておきたい。

2.2 離散的な数量をいう場合（計数）（【－連続的】）

2.2.1 限定、状態（【＋形態】）

離散的な数量を表す、すなわち個体量詞として先行研究が挙げるもののうち最も古いものの一つとして“编”がある[9]。

28) 或取一编萱焉，或取一秉秆焉，国人投之，遂弗爇也。（左传・昭 27）
29)（父）出一编书，曰；（汉书・张良传）

而不获一禽。”（孟子・滕文公下））、集合量詞として用いられる場合は、動詞を出自としている可能性も否定できない。

[8] 刘世儒 1965（pp.203-204）によれば、矢の扱いは一般に 4 本一組であるが、一度に一組放つのを基準とする場合と、一過程の 3 組放つ場合を基準とする場合とで“发”の量が異なる解釈があるという。すなわち前者では“矢一发”の矢の本数は 4 本であるが、後者の場合は 12 本に解釈されるという。そして、“这就是这种称量法的大毛病。所以后来发展，这种‘定数用法’就不再沿用了”と指摘している。

[9] 刘世儒 1965 p170、向熹 1993 p44、吴铮 2005 p431 など参照。

“一编菅”は「一枚のとま、むしろ」であり、「とま、むしろ」が“菅”「すげ、かや」を編んでできたものであることを考えると、“编”は実質的意味を保持した修飾語にすぎないと解釈することもできよう。ただ、“一秉秆”と対句的に用いられていることから“秉”と同様“编”もまた量詞と扱うなら、“菅”一語で「とま、むしろ」の意味を持ち、その場合“编”が共起するのは、それが“菅”の一つの属性を表すという意味関係によるといえよう。28）が《左传》の用例であることと、当時モノの数をいう時に「数詞＋名詞」という形式が広く用いられていたことを考えると、“编”をa)修飾語とする、b)量詞とする、のいずれの解釈も否定しがたい。少なくとも、この用例は“编”が、その後量詞として一般に認められるようになるための初期的、または過渡的な用例であり、動詞からの分化が明らかでないことは指摘できよう。

やや時代が下って29)の用例では、“编”の直接の対象は竹簡であり、竹簡が綴じられてできた“书”に対しての“编”は、もはや、“菅”に対するそれのような限定的な修飾語とは考えにくい。量詞としての“编”の文法化が進み、“书”の属性を表すという意味関係に基づいて使用されたものであろう。ただ、“编”が付加することで、結果的には、“书”すなわち手紙や文書が一枚ではなく、冊子体になったものであることを明示することができ、一定の意味役割を果たしている。

同様な関係にあるものとして、“卷”“剂”“堵”などの例が挙げられる。

30）见其国主床头有书数卷，乃是子升文也。（魏书・温子升传）
31）少君乃与其成药二剂。（神仙传・卷6）
32）若惧拜扫不知兆域，当筑一堵低墙于左右前后随为私记耳。（颜氏家训・终制篇）

30)では、29)と同様“书”という対象物が示されているが、“卷”が付加されていることで、それが巻物となっていることが分かる。巻物となった“书”というのは、“书”の下位分類された一つのタイプであり、“卷”は“书”の属性を表すという意味関係に基づいて共起している。31)の“成药”は調合してある薬であるから、“剂”が共起したからといって対象物について更なる情報を提供するというわけではない。その点では剰余的ですらあるが、対象物との意味関係は、やはり属性であり、29)30)の形式に準じているといえる。32)の“低墙”に対する“堵”もまた剰余的な属性表示となっているが、それにも関わらず“堵”が付加された動機は、やはり意味的必要からというより、形式的必要からではないかと推測される。

2.2.2 作用、働きかけ

さて、動詞がある事物の属性を表すのは、“编”や“剂”のように、その動作・行為

の結果が対象物に内包される状態としての読みが可能だからである。一方で、動詞と対象物の関係を考えると、状態との解釈が難しいものもある。例えば、“张”である

33) 特做大弓两张，送与康生。（魏书・奚康生传）
34) 诏赐……黄布幕六张。（魏书・蠕蠕传）

“张”は、「弓に弦を施す」を原義とする動詞であることから[10]、“张”「(弦が)張ってある」は弓に対して、2.2.1 のタイプと同様、内包的な状態を示しているように見える。しかし“张”の直接の対象、つまり対格は弦であり、弦を張る木または木と竹でできた湾曲した部分（この部分のみを指して「弓」ということもある）は、その受け手、つまり与格に当たる。したがって厳密に考えれば、“张”と“弓”との意味関係は、“剂”と“成药”、“堵”と“低墙”の関係とは異なり、内包される状態ではなく、作用、働きかけといった性格のものになろう。同様の意味関係は、“张”と“幕”の場合にもみられる。34)の“黄布幕”は、折りたたまれて収納されているような場合でも“黄布幕”であり、“张”は“黄布幕”であるために欠くことのできない本質的な状態ではなく、最も関係のある作用といえよう。

35) 子渊附书一封。（洛阳伽蓝记・卷 3）
36) 愿造弥勒佛像一铺。（隋大爷元年《大海寺唐高祖造像记》）

さらに 35)の“书”や 36)の“弥勒佛像”についても、“封”や“铺”の表す状態でなくとも“书”であり、“弥勒佛像”であり、“封”や“铺”は最も関係の深い作用、或いは習慣的になされる働きかけというべきである。

こうしたタイプは、動詞の語彙的意味が対象物についての情報を増加させるわけではなく、形式的な性格の強いものであると見ることができる。しかし、対象物の内包する状態ではないという点で、2.2.1 のタイプとは異なるものとして分類するべきだと、本稿では考える。ただ、ここで疑問となるのは、そもそも 3 次元世界に存在する対象物の量を表すために、意味的な必要が認められないにもかかわらず、何故、動詞、すなわち作用や働きかけを表す語が用いられるようになるのだろうかということである。

対象物を離散的に言う場合、名詞を出自とする語が量詞として働くようになった本来の意味関係には、①名詞の繰り返し、または上位概念、②部分、③置き換えが挙げられる[11]。そのうち、動物を数える際の“头”、人を数える際の“名”などの②部分に当たるものは、部分で（対象物）全体を数えるメトニミーの関係にある。一方、作用

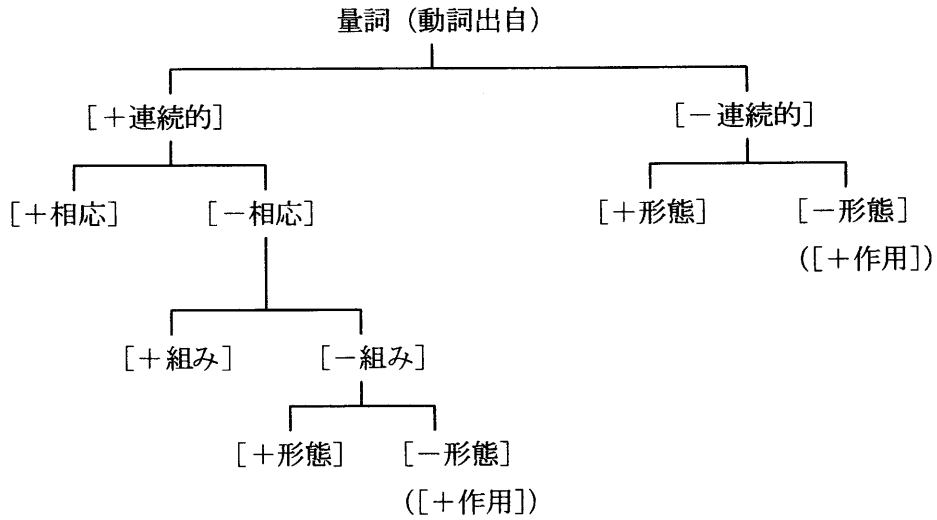
---

10 “张，[也攵]弓弦也。”、段注に“[也攵]，敷也。”(『説文』)。[ ]内の語は一字。
11 橋本 2009 参照。

や働きかけといったプロセスもまた、tie が[結ぶ→ネクタイ]、date が[デートする→デートの相手]のように、対象物という参与者のメトニミーとして扱われうる[12]。つまり、作用や働きかけを表す語も、“头”や“名”といった名詞を出自とするものと同様、メトニミー的関係から量詞として機能するようになったというわけである。加えて、2.1.4 で取り上げたように、連続的量をいう必要から付加される量詞の中に、作用・働きかけの意味関係のものがあることも、離散的量を言う場合の量詞として、動詞が選択肢の一つとして挙げられるに十分な先行例となったと考えられる。

2.3 まとめ

意味関係から見た動詞を出自とする量詞のまとめとして、以下の図で示す。



3．意味的、機能的な変化

本来動詞であったものが、量を表すのに用いられることは、決して中国語に特有の現象ではなく、日本語でも「一抱えの木」「刀二振り」「味噌汁ひとよそい」などにも見られる。ただ、日本語の場合、量を表すのに用いられる動詞の意味や対象物との関係に大きな変化が見られないのに対し、中国語のそれは本来の意味関係から離れた用法のものがある。この点について、以下に見ていく。

3.1 意味的変化 —— 本来の意味の希薄化、対象物との関係

例えば、“卷”である。書物を数えるのに“卷”が共起するのは、古くは紙や布に書

[12] 瀬戸 2005 では、プロセスは、その参与者（行為者、素材、道具、場所、対象）とメトニミー的多義を示すことを指摘している。

かれていたものが巻かれた状態で保存されていたからである。時代が下って、書物は必ずしも巻かれず綴じたものもあるようになったが、それでもなお書物は“巻”で数えられた。“巻”は、書物を数える量詞という関係がいったん成立したことによって、本来の意味は絶対的属性ではなくなり、希薄なものとなった[13]。

また“编”は、竹簡を順に並べる行為を表すことから、書物を数える際に共起したことは前述したとおりであるが、実際には南北朝期の例としても少数派であり、“书”の量詞としては“本”や“册”を用いられることの方が多かったという[14]。唐代では詩を数える際に用いられる例が確認されているが、その意味するところは原義とは異なる。

37) 读诗尽数编。(韩愈《秋怀诗》)

つまり、書物を数える際の“编”は、「編む ⇒ 編成、編集する」の意味を含んでいるが、詩を数える場合には、幾つかの詩を「編集する」のではなく、詩一作品を“编”＝「創作する」の意味として用いられている。このことを、客観的な編集作業から、主観的なあるいは内なる編集作業への意味的拡張と見ることもできるが、“书”に対するような物理的な働きかけが認められないという点で、本来の意味からはややずれているといえよう。

一方、今日でもなお常用されるものに、“张”があるが、結びつく対象物が徐々に拡大した結果、「弓に弦を施す」という原義はもとより、“张开”＝「広げる、伸ばす」の対象とはならないような場合にも用いられている。

38) 丈六床两张，八尺床一十六张，内三张细，连心床一张……(济渎庙北海坛祭器碑)
39) 却说鸨儿一见许多东西，就叫丫头转过一张桌。(元・话本选集)

“床”は、本来広がりのある状態のものではあるが、広げるという動作の対象になるようなものではない。“桌”についても、確かに折りたたみ机というものはあるが、広がった状態で存在しているのがより一般的である。すなわち、“张”は「広げる、伸ばす」という属性を持ったモノのみならず、「広がり、平面」をもつモノへとその用法が拡大していった。今日では、汽車の切符や顔など、およそ「折る、曲げる」という行為をしない、従って“张”という行為をしないものにまで用いられ、その点で本来の動詞と対象物との関係が変化し、同時に動詞の意味が希薄になっているといえよう。

---

13 陈颖 2003 p. 76 参照。
14 刘世儒 1965、p.170。

3.2 機能的変化 —— 集合量詞から個体量詞へ

一方、意味関係的には明らかな隔たりはないが、用法に変化の見られるものがある。例えば、「揃える」という意味から「揃い、セット」という量を表す集合量詞として用いられるようになった“具”である。

40) 人就其间得龙骨一具。(述异记・卷下) =21)
41) 因畅为河南尹，时久旱，祷祠无应，乃收葬傍城客死骸骨百余具。(独异志卷中)

40)のように、対象物が骨であるなら、“具”は、組み合わせれば龍の骸骨となるような何十本もの骨を連続的に捉える単位とみなすことができる。しかし、41)の骸骨はそもそも骨が組み合わさっているものを指すため、骸骨という概念そのものに対する量詞としての“具”は、連続的な量ではなく、離散的な量を表すと見るべきであろう。

42) 男尸一具，肩背刀伤一处，径二寸八分。(清・狄公案)

さらに時代が下ると、“尸”「死体、なきがら」を数える際に用いられるようになり、やはり離散的な量、すなわち個体量詞として働いていると解釈せざるを得ない。バラバラになった“尸”もあることを考えるなら、「揃い」という“具”の意味は必ずしも希薄ではないが、“尸”に対して集合量詞とはいえず、個体量詞へと用法を拡張させたことが分かる。

また、“把”についても同様の現象が見られる。

43) 吾已晓破之之术，乃敕各持一把茅以火攻。(吴志・陆逊传)
44) 当风只消一把火，当时柴堆便成灰。(敦煌变文)
45) 先买一把勺头，绾一条手巾。(虚堂和尚语录 1018 中)

“一把茅”は「一握りの茅(ちがや)」であり、“一把”は茅の連続的に捉えた量を表している。それに対し、“一把火”は、“火”が点いている松明が一握り分であることを示しているが、“火”に対する“一把”は松明の先端部分を離散的に捉えていると考えるべきであろう。さらに“一把勺头”は、“勺头”を一握り、すなわち何本も買ったとは考えにくく、あくまでも一本の“勺头”であり、“把”は“勺头”を離散的に捉えた量を表す個体量詞といえる。“把”は、時代が下るにつれ結びつく対象物の範囲を広げていったが、離散的量を言う場合には、【取っ手】のあるものについて用いられ、現代においては<取っ手のあるもの>というカテゴリーの標識として機能していることは周知のとおりである。

4．おわりに

以上、本来動詞であったものが、量詞として機能するようになったことについて、成立期における対象物との意味関係を幾つかのタイプに分け、またいったん量詞として成立したものの中には、意味的、機能的に変化したものがあることを示した。こうした変化があったことは、中国語の量詞という文法的カテゴリーを論じる上で、重要な現象であると思われるが、この点については、稿を改めて考えたい。

≪参考文献≫

瀬戸 賢一 2005 『よくわかる比喩』研究社

橋本永貢子 2008a 试论量词“把”的语义网络，『岐阜大学地域科学部研究報告』第 22 号，59-68

2008b 「量詞“张”の意味的ネットワークについて」『岐阜大学地域科学部研究報告』第 23 号，67-77

2009 「名詞から量詞へ」『岐阜大学地域科学部研究報告』第 24 号，29-43

陈 颖 2003 《苏轼作品量词研究》巴蜀书社

何 乐士 2000 《左传》的数量词，《古汉语语法研究论文集》商务印书馆，318-351

洪 藝芳 2000 《敦煌吐魯番文書中之量詞研究》文津出版社有限公司

黄 盛璋 1961 两汉时代的量词，《中国语文》8 月号，21-28

黄 载君 1964 从甲文、金文量词的应用，考察汉语量词的起源与发展，《中国语文》第 6 期，432-441

刘 世儒 1965 《魏晋南北朝量词研究》中华书局

王 力 1989 《汉语语法史》商务印书馆

王 绍新 1992 〈唐代诗文小说中名量词的运用〉《隋唐五代汉语研究》 山东教育出版社

吴 铮 2005 《左传》个体量词分析，李锦芳主编《汉藏语系量词研究》中央民族大学出版社，426-433

向 熹 1993 《简明汉语史》高等教育出版社

宗 守云 2007 从范畴化过程看量词“副”对名词性成分的选择 世界汉语教学第 4 期,21-32

Hopper, P.J & Traugott, E.C 1933 *Grammaticalization.* Cambridge University Press